

向かい風、とくに風当たりの強い強風に向かって突き進むときは、背を低くして、自然の流れで風を往（い）なす姿勢で乗り切るのが常道だ。にもかかわらず、自分の力を過信して居丈高に強風に向かって突き進むと、ちよつとしたはずみで吹き飛ばされることになる。

政権を奪還して5年半。立憲主義を踏みにじり思いのままに政局を操り、野党を蹴散らし、一強体制の中で傲慢不遜とも言える態度が強まる今の政権を見てると、そんな情景をつい思い浮かべてしまう。“敵失”も手伝って追い風に乗っての「一強多弱」の5年余の終幕が、いま始まろうとしているのかもしれない。

首相夫妻が深くかかわる2つの学園疑惑は、明らかに首相による国政の私物化そのものであり、韓国でなくても先進国なら失脚だけでなく刑事訴追ものになる。海外のメディアではそのように報道しているが、この国では「心やさしい国民性」でもあるのか、事件が表ざたになってから1年間、この2月までは高い支持率を保ったままここまで来た。この国民性自体が、海外の真つ当な物差しからすれば、この国の不可思議性の一つでもあるらしい。

トップがそうなら、政権のNo.2である副総理もまた、トップに輪をかけたように、セクハラ発言で連日にぎわせている。これまた、いま欧米ではこうした発言で政治生命を断たれた政治家が続出しているのに、この国ではそうはならない。テレビのワイドショー番組では連日取り上げてはいるが、面白おかしく“揶揄”してはいるが、真つ向から批判するのに躊躇している。

政治が政治なら、官僚の世界も同じく迷走状態が深まっている。公文書改ざんや目に余る忖度の横行。誰のための官僚組織であるのかが、完全に忘れ去られている。今や死語になったのか「公僕」という言葉が、過去のものになっている。公僕は、公に仕える僕を指すが、この場合の「公」は、現行憲法下では主権者である「国民」を指す。人事上の任命権者は首相であるが、憲法上の忠誠を誓う相手は、主権者国民であるということが忘れ去

られている。政治家も官僚も「公僕」であり、国民に忠誠を誓う存在であることが、政治家や官僚だけでなくメディアもこの国では忘れていてのではないかと思いたくなる。

振り返れば、かつてこの国は世界から羨望の眼差しを浴びていた時期もあった。戦後の荒廃した国土から、短期間のうちに経済復興を成し遂げ、国民生活も物質的な面では豊かな経済大国に引き上げた高度成長時代だった。この時期の政治家や官僚も、さらには経済人たちも、経済成長という「追い風」の中で仕事をし、国民もまたその仕事に一定の評価を与えたことから、自民党一党支配という長期政権が続いた。

しかし、バブル経済の崩壊とともに訪れた1990年代以降の世界レベルの「歴史的転換期」の中で、“成長経済ボケ”した政・官・財の人たちは、成長なき社会や人口縮小社会、国際社会におけるポスト冷戦構造などの新しい国際政治の枠組みに発想が及ばず、ついていけない状態が30年近く続いていることになる。

追い風を失って失速し、向かい風に対応する術を知らない人たちが、右往左往し、国民は翻弄される。アベノミクスなる怪しげな経済理論を振り回し、この国の経済と財政を取り返しのつかないところに追い込んでしまった。いや「この5年余の政治で、取り返しのつかない状態にしてしまった」ことにも気づかない重症とも言える。

マンション管理の世界も同じことが言える。この35年ほどで600万戸を超える規模に膨らんだ分譲マンションに、適切な管理体制を形成しなければ将来取り返しのつかない状況が生まれるにもかかわらず、居住者の多くも、自治体の多くも、国の住宅政策も、近い将来に直面する「向かい風」に気づいていない。この国の都市型住居の惨状に直面する、その時になって慌てることのないようにしたい。

(副理事長 松本 誠)

※次回のタイトルは、「ぜ」から始まることばです。